



「国策紙芝居」—北海道(札幌・京極町)調査報告

大串 潤児
(信州大学人文学部)

はじめに

神奈川大学非文字資料研究センターの共同研究「戦時下日本の大衆メディア研究」はすでに本 NewsLetter でもたびたび紹介されているように、おおよそ二つの問題意識を共有しながら研究調査を進めている。それは、本センター所蔵の 241 点にのぼる「国策紙芝居」コレクションを対象にして、第一に、紙芝居の実演現場や表現様式、他の文化作品からの自立性を論じることで、広く多様な表現ジャンルの相互関係を分析するという方法的立場をとりつつ、大衆メディア・大衆文化の戦時社会における特徴を論じることであり（「大衆文化の相互性」という方法的視点）、第二に「本土」「内地」のみならず、植民地をも視野に入れて、地域社会における活動（実演現場）の具体相を明らかにしていくこと（「地域における実践」という視点）、である（安田常雄「紙芝居共同研究の根もとにあるもの」『News Letter』No. 32、2014年7月25日など）。

「地域における実践という視点」にあっては、すでに福岡県朝倉市—それは大刀洗陸軍飛行場近在の軍郷であったが—をはじめとする九州調査が行われており（『同』No. 34、2015年9月30日）、また植民地にあっては朝鮮における紙芝居をめぐって韓国の研究者との交流が始まり*¹、数次にわたる台湾史料調査が行われ、大きな成果を挙げつつある（『同』No. 34、『同』No. 35、2016年1月31日）。こうしたなかで、国内地域における紙芝居活動の調査は相対的に遅れ気味であり、全国書誌目録の整備とも関連して今後の課題となっている。

ところで、近代日本はその国家形成の過程において「内国植民地」と位置づけられる地域社会を「併合」してきた。いうまでもなく沖縄と北海道である。「地域における実践という視点」においても、「本国」—「植民地」という枠組みのみならず、そのいわば「接点」にある両

義性を含んだ地域としての「内国植民地」を積極的に取り上げることが重要になってくるだろう。それは、前述した第一の論点と第二の論点を交錯させたところに浮かび上がる「国策紙芝居」と「在来の民衆娯楽」との緊張と相互浸透の具体相という問題とも関連し、「本土」「内地」における地域文化の多様性と「国策紙芝居」の関連を照らし出す対象にほかならないからである*²。

I. 北の大地に紙芝居を求めて

こうした問題意識から 2017 年 1 月 6～9 日、筆者は北海道調査を行った。北海道における紙芝居文化についてはすでに谷暎子さんの先駆的かつ網羅的な研究があり（『占領下の児童出版物と GHQ の検閲：ゴードン・プランゲ文庫に探る』共同文化社 2016 年、同「北海道の紙芝居の歩み 戦中と戦後」『紙芝居文化ネットワーク』53、2016 年 9 月 25 日）、北海道立文学館の企画展「紙芝居の今昔」（2013 年 5～7 月）をきっかけとして道内所蔵作品目録も整備されつつある（北海道立文学館編「北海道の紙芝居 道内所蔵紙芝居リスト（1930～50 年代）」2013 年 6 月、これ以後の追加分については「北海道内の諸機関、個人所蔵の紙芝居リスト 1933～1949 年」『資料情報と研究』2013 年 3 月）。

また虻田郡京極町において未見の紙芝居が発見され話題になってもいた。京極町では「戦時下の国策紙芝居発表会」も実施され、関心の高さがうかがえた（『京極読書新聞』第 52 号、2013 年 12 月 1 日）。

本調査もこうした北海道における研究動向をうけて、主として非文字資料研究センターが所蔵していない作品を中心に実際に紙芝居の実物を閲覧すること、また周辺史料の調査、さらに北海道における研究状況について谷さんと打ち合わせを行うことを目的として実施された。

II. 北海道紙芝居運動

2017年新春の北海道は例年にない大雪に見舞われ、直前まで調査行程には不安が残るものであったが、幸いにも調査のあいだは良く晴れた日が続いた。調査初日、札幌には午後に着いた。冬の日暮れは早い。その日のうちに、札幌から小樽、そして山間部をこえて倶知安にまでたどり着かなくてはならない。限られた時間ではあったが、北海道大学附属図書館で戦時教育関係の雑誌を調査した。本共同研究の共有財産ともなっている新垣夢乃・



写真1 北大附属図書館における調査にて、『北海教育評論』

松本和樹報告「日本教育紙芝居協会の活動（1938年～1942年）」によれば1936年の時点で北海道には385人の街頭紙芝居業者がおり（内山憲尚『紙芝居精義』東洋図書1939年）、雑誌『教育紙芝居』『紙芝居』には協会支部数2、地方活動として16事例が摘録されている。その数は決して少ない方ではない。また、「北海道は紙芝居が非常に盛んである」とも指摘されている。（園池公功「北海道の旅」『紙芝居』第6巻第1号、1943年1月）。では北海道紙芝居の担い手は誰であったのか？

北大図書館が所蔵している北海道連合教育会機関誌『北海道教育』および教育科学研究会北海道支部関係者が多く寄稿している『北海教育評論』の1937～1944年（『北海教育評論』は1941年まで）を閲覧する。『北海教育評論』には教育科学研究会・生活綴方運動関係の教員が紙芝居関係について記事を書いている。紙芝居運動の一つの拠点は旭川であったようだ。土橋明次・西岡信愛らが中心人物である。1941年には北海道生活綴方

連盟の弾圧事件があり、それ以後紙芝居関係についての発言では、むしろ札幌市の国民学校教員が教育会機関誌『北海道教育』に多くの記事を寄せるようになる。このあたりの組織的な展開は複雑であるが、生活綴方運動と教育紙芝居運動の末端の連関が重要な論点となるだろう。北海道の場合「生活図画事件」といった図画教師の弾圧事件が特徴である。

こうした紙芝居運動の軌跡はすでに谷さんが明らかにしている。今後は、例えば旭川や釧路など、より地域に即した個別の活動を、地域文化運動（一教育科学研究運動など）や人物史の方法をもふまえて詳細に明らかにしていくことであろう。

また、調査はできなかったが、①学校教育映画との関連、②「樺太紙芝居協会」の動向、も重要な論点である。

参考までに北海道生活綴方聯盟から教育紙芝居協会への道程について略年表を掲げる*3。

1939年10月 松田繁美（図案家）、札幌で日本教育活動画劇協会を設立、「動く紙芝居」で特許（『北海タイムス』1939年10月21日）、松田は「小樽でおなじみの紙芝居の小父さん」（『小樽新聞』1942年4月20日）と呼ばれていた。

1940年11月20日 北海道生活綴方教育連盟事件。

1941年2月23日 札幌市教育紙芝居研究会発足。

会長・石附忠平 幹事長・森善次 監事・金子要、三浦一、松田武雄、宮島戸三郎、新妻清 顧問・道庁視学、札幌師範学校長、札幌市教育課長。

1941年～ 教育紙芝居出版協会から「月刊翼賛紙芝居」を刊行（広告による）、家庭版（小型版）紙芝居も同時発売（「動く紙芝居」）。家庭版の場合「北海道画劇教育協会紙芝居部」刊行となっている（北海道教育紙芝居協会と同一所在地）。

1941年12月 社団法人北海道教育紙芝居協会設立。

この頃、「北海道教育紙芝居利用組合」も存在、国民学校・産報関係に取り次ぎ。

1942年7月4日 札幌市少国民文化協会設立。

1942年12月27日 社団法人北海道教育紙芝居協会設立総会（『北海タイムス』1942年12月28日）。会長・佐々木毅一（道視学） 副会長・石附忠平 専務理事・



佐藤信一。
1943年1月 札幌教育紙芝居研究会設立(『北海道新聞』
1943年1月22日)。
1943年3月 『北海道教育』において「紙芝居講座」連
載開始。
1943年9月 北海道教育紙芝居協会「空の軍神」前篇・
後篇初版刊行(佐藤信一脚本・松田繁美画)。
1944年1月 社団法人北海道教育紙芝居協会、日本教
育紙芝居協会北海道支部(支部長・石附忠平)となる。
1944年9月 北海道教育紙芝居協会「空の軍神」前篇・
後篇再版刊行。
1945年7月 北海道教育紙芝居協会専属工場にて日本
教育紙芝居協会「貝の火」を印刷。

Ⅲ. 羊蹄山ふもとの街で

ニセコアンヌプリと羊蹄山にはさまれた虻田郡倶知安町はニセコ国際スキー場で著名な町だが、同時に陸上自衛隊倶知安駐屯地を抱える町でもある(駐屯は1955年)。その倶知安からクルマで20分ほど東に走ると虻田郡京極町の中心部に出る。調査日はよく晴れた日で、右手に羊蹄山の美しい山の姿を見ながらのドライブだ。



写真2 京極町生涯学習センター湧学館

京極町生涯学習センター湧学館を訪問。早速、併設されている図書館で司書の新谷保人さんの案内により「国策紙芝居」を閲覧、その内容・来歴などについて説明を受ける。湧学館にあるものは、当地にあった京極農場管理人の一人で京極郵便局長もつとめた家(阿部長之助編『京極村史』京極村1957年)のご当主が持っていたものであるという。確かに紙芝居の裏には「札幌通信局選定」という捺印のあるものがあつた。持ち主の家は

地域の名望家であり、かつ郵便局吏員であったことから多くの印刷紙芝居が残っていたと思われる。

湧学館には簡単なながらも充実した町の歴史を展示するコーナーがあつた。町の名の由来ともなっているが、この地は、華族・京極家による農場開発が行われた地域である。また1920年代に協方鉄鉱山の開発がさかんとなり室蘭まで鉄鉱石を搬出していた。胆振線全通(1940年)の際には第七師団長も出席するほどであり、軍需産業の中心地であつた。

湧学館では、①日本教育紙芝居協会が作成したもので非文字資料研究センターが所蔵していないもの、また京極町にしか現存が確認されていないもの、および②北海道における各紙芝居団体が独自に製作したものを基本に閲覧・撮影を行った。

北海道教育紙芝居協会製作の「空の軍神」前後編(佐藤信一作・松田繁美画、1944年9月14日18枚、後編第2版は陸軍航空本部指導16枚)は修正をほどこした版が北海道立文学館に所蔵されているので、改作のあとがたどれる。陸軍単戦闘機隊の「英雄」加藤建夫の物語だが、加藤は旭川出身でもあり北海道における紙芝居運動と軍都—そして文化運動がさかんであつた旭川との関係もより詳細に分析してみたいところである(谷口広志『わが落穂ひろい—文化運動の軌跡』旭川文化団体協議会1981年など)。



写真3 紙芝居「空の軍神」前編(佐藤信一脚本)
北海道教育紙芝居協会・1944年
所蔵:北海道立文学館

「ピョコちゃんとピョン助君」(佐藤信一作・村山末雄画、1944年11月20日16枚—1枚め欠)は北海道画劇教育協会紙芝居部会作品・北海道画劇教育協会印刷出版。カエルの「ピョコちゃん」と「ピョン助君」、彼らに知恵をあたえる蝸牛の老夫婦の話。蛇ににらまれて



写真4 紙芝居「ピョコちゃんとピョン助君」(佐藤信一脚本)
北海道画劇教育協会・1944年
所蔵：北海道立文学館

も保護色で助かることがある。急に話は転じて軍の「迷彩色」についての話となる。教育紙芝居協会が最末期に印刷刊行した「貝の火」(宮沢賢治原作・堀尾勉脚色・油野誠一画、1945年7月25日20枚)が見られたことは個人的には一つの成果であった(印刷は札幌の北海道教育紙芝居協会専属工場、札幌市立中央図書館にも所蔵されている)。子どもむけ童話ですら、戦争の時代にはどのようにゆがめられるのか、を示すもの、という新谷さんのことばが耳に残った。新谷さんのご厚意で充実した調査ができた。心地よい疲れとともに小樽をへて札幌へ戻った。

IV. 北海道紙芝居研究の現状

札幌は粉雪が舞う天気だった。北海道立文学館で谷暎子さんと紙芝居研究についての情報交換を行う。おおむねこれまでの研究に即した札幌・北海道の紙芝居運動動向、史料保存状況、研究段階について説明と意見交換を行った。谷さんによれば、札幌を中心とした研究はだいたい進んだが、函館地域についてはまだまとまっていない(遺愛幼稚園に今井よねに関連する紙芝居や、国策紙芝居が多く所蔵されている)。さらに、北海道で独自に製作された紙芝居の現物は長年の調査にもかかわらずほとんど見つかっていない。現時点では前掲の「目録」が到達点、とのことであった。

なお谷暎子さんは、本共同研究の進捗には期待しているとのことであった。またすでに本共同研究でも注目している Propaganda Performed : Kamishibai in Japan's Fifteen Year War, Brill Academic Pub.2014. の著者であるブリティッシュコロンビア大学 (University of British

Columbia : UBC) のシャラリン・オルバー (Sharalyn Orbaugh) さんとの間には研究交流があるという。

以下は谷さんとの対話のなかで議論された北海道における紙芝居研究の課題である。

①北海道教育紙芝居協会はサハリン(樺太)までも活動範囲に含めていたようである。紙芝居関係の団体も結成されている(1941年4月 樺太庁交通部通信課により豊原市に「樺太紙芝居研究会」設立総会)。サハリン(樺太)にまで視野を広げた北海道紙芝居運動の動向はほとんど明らかになっていない。『樺太日日新聞』などの記事を丁寧に分析するほかない。

②「月刊翼賛紙芝居」の現物確認。北大図書館所蔵の『北海道教育』『北海道教育評論』広告欄によれば北海道で刊行された「月刊翼賛紙芝居」としては以下のものがあつた(1941年4月から毎月1回刊行という)。谷さんによればいずれも現物は未発見である。

「金鶏の松」(第1輯)、「鉢の木」(第2輯)、「むくむく二つ」(第3輯)、「部落の太陽」(第4輯)、「コロポックル」(第5輯)、「炭坑の父」(第6輯)、「孝行合戦」(第7輯)。

なお「吹雪の集配」は第3輯として予告されていたが刊行されていない。「月刊翼賛紙芝居」に関係した機関としては「札幌教育紙芝居研究会」「教育紙芝居出版協会」があり、個人としては北海道の画家・澤枝重雄がいる。

③アイヌ関係紙芝居の現物と関連史料、文献の確認。前掲「コロポックル」や未刊の「吹雪の集配」などがそれにあたる。中央で製作された紙芝居「責任」(小島鐵廣原作脚色・加藤春雄画・大日本文化画劇報国社、1941年)が素材とした釧路市の通信官吏でアイヌであった「吉良平治郎」について取り扱っている。「吉良平治郎」については釧路市で顕彰(市民劇2012年)・検証の運動がある(松本成美「アイヌ逋送人 吉良平次郎と山本多助」アイヌ文化財団普及啓発セミナー講演録2006年)。

なお、わずかな時間ではあつたが余裕ができたためリニューアルオープンした北海道博物館(旧開拓記念館)を急ぎよ訪ね、同館所蔵の炭鉱の「安全運動」に取材した紙芝居作品を閲覧することができた(「安全紙芝居



母の顔」大日本産業報国会安全部編纂・蒲生俊文原作・竹泉平三九脚色・飯沼賢一画・大日本画劇株式会社製作、1941年6月19日40枚、収蔵番号41964 熊野喜蔵(森町)コレクション)。同館にはほかに第1次上海事変時のニュース紙芝居と街頭紙芝居が多数所蔵されているが、いわゆる「国策紙芝居」はこの1点のほか確認できなかった(突然の訪問にもかかわらず、対応して下さった同館の学芸員・司書のみなさんに感謝します)。

そのほか今回は調査できなかったが、北海道を舞台にした「国策紙芝居」としては、前掲「責任」(通信総合博物館所蔵)、「地底の戦士」(非文字資料研究センター所蔵、補充購入)があり、北海道立図書館北方資料コレクションには「北門の曙 郡司大尉」(広瀬彦太作・吉井忠画、畫劇報国社(東京)1943年4月20枚、大日本青少年団本部推薦、非文字資料研究センター所蔵なし)や「北洋に咆える人々」(野村政夫原作・青木緑園脚本・西正世志画 興亜畫劇(東京)1944年9月20枚 高田屋嘉兵衛の物語)が存在する。地域で独自に出版された紙芝居と同時に、地域を舞台・素材にした紙芝居の実演(およびその反響)もほとんど解明されていない論点の一つである。

V. 調査のまとめ

本調査の成果と課題をまとめておこう。

1) 北海道における教育紙芝居運動は、①1930年代後半期の教育科学研究会の教育紙芝居運動(特に旭川が中心)と、②1941年、同運動弾圧後の北海道教育会所属教員・主導による教育紙芝居運動の2段階にわけて考えることが出来る。綴り方教師(北海道の場合は「生活画」も含む)の役割については、雑誌『教育紙芝居』『紙芝居』や福岡県朝倉町の調査でも確認されているところなので、おさえるべき論点となる。

2) 北海道における紙芝居運動を担った団体には、北海道教育紙芝居協会は、出版協会や教育紙芝居研究会(札幌市レベルと北海道レベル)、また画劇研究会出版部、配給組合(樺太を含む)など多くの組織があり整理が難しいが、現在のところおおむね谷映子さんの論稿によりその変遷は理解できる。ただ、団体・運動・実践の個々の担い手個人にまで視野を広げれば作品原作者、教員、

画家を含めて、その個人史がよくわかっているわけではない。

また、北海道教育紙芝居協会(日本教育紙芝居協会の支部扱い)は専属印刷工場を持っていたようで、1945年7月25日「貝の火」はここで印刷されている。紙芝居生産における北海道の位置—それは、5)で指摘する戦後の出版状況とも関連するが—は確認しておくべき論点だろう。

3) 北海道教育紙芝居協会独自のものと「月刊翼賛紙芝居」(確認されたもので7輯)はほとんど現物が残っておらず、史料発掘そのものが課題。

4) 北海道における教育紙芝居運動は、サハリン(樺太)を視野に入れる必要がある。紙芝居関係の団体の存在は確認されているが、その活動については新聞記事をトレースしている段階である。台湾・朝鮮・満洲にくわえ、樺太の問題をどう考えるかということが視野に入ってきた。またアイヌの問題や地域の素材(この場合は北海道)を扱った紙芝居の意味などが論点になる。

5) 戦後の検閲にまで視野を広げれば、札幌・北海道は目立った戦災もないため戦後初期の出版ブームがあり、こうした文化状況との関連が問題となる。

6) その他、函館市のいくつかの幼稚園に今井よねの紙芝居や戦時中紙芝居が多く保存されている(「北海道内の諸機関、個人所蔵の紙芝居リスト 1933～1949年」参照)。軍都・旭川や、アイヌとの関連で興味深い旭川・釧路、労働運動を基盤とするプロレタリア文化運動がさかんであり、かつ海を通じた先進文化・思想が流入してきた小樽など、道内各地域の紙芝居状況の整理が課題となる。

関係各位のご厚意で充実かつ意義のある調査となった。この小さなレポートで共同研究の今後への問題提起になると同時に、いくらかでも調査の成果を還元できればと思う。

VI. 補論—北から南へ

沖縄は本共同研究においてもほとんど手がついていない地域・問題領域である。前掲の新垣・松本報告を見ても沖縄における教育紙芝居協会の支部や活動はほとんど記録されていない。

2017年3月、本センターの業務ではないけれどもまたまた本務校のゼミ合宿の際、那覇市歴史博物館を訪ねて詳しい話を聞くことができた。担当学芸員の山田葉子さんの話によると、各地博物館所蔵の文化財・史資料や地域調査のなかでも紙芝居についてはほとんど話が出てこなかったようだ。那覇市歴史博物館に紙芝居は所蔵されていない。

また南城市史編さんに携わっている友人の吉川由紀さんから、南城市でも紙芝居についてはほとんどわからないが、南城市域・當山部落の戦時農業共同作業*4にかかわって紙芝居が製作された様子が『大阪朝日新聞 沖繩版』1942年8月2日付に掲載されており、その記事を戴いた。後日、きちんと『大阪朝日新聞 沖繩版』を通覧調査したわけではないが、一つの手がかりとなる。南城市史編さん室でも紙芝居についてはほとんどわからず、情報を教えて欲しいとのことである。



写真5 『大阪朝日新聞 沖繩版』1942年8月2日に掲載された。沖繩県島尻郡玉城村當山（現在、南城市）における女性たちの農業共同作業を素材に「軍国の妻女部隊」と題された紙芝居が作成され、戦地慰問団で用いられるという。吉川由紀さんから提供を受けた。

新聞を精査することがまず行うべき課題となろう。また、近年、沖繩文化協会『沖繩文化』が復刻（不二出版から2014年）されるなど、史料状況も整備されてきている。沖繩における翼賛体制や翼賛文化運動にあっても研究が進んできているようで、今後、調査が必要になってくるだろう（仲程昌徳『雑誌とその時代：沖繩の声 戦前・戦中期編』ポーターインク 2015年）。そして沖繩における紙芝居の活動状況は、本共同研究の方法を活かせば、琉球・沖繩在来の民衆（娯楽）文化と1920年代以降のモダニズムと海外移民の持ち込んだ文化、そうした土壌（地域文化）のうえに展開されてくる皇民化の論理を内在させた翼賛文化運動と地域文化の拮抗という問題になるはずである。

なお、対馬丸記念館には石垣島在住の資料コレクター提供の国策紙芝居が展示されている。後日公式ガイドブック（対馬丸記念会監修『対馬丸ガイドブック』東洋企画印刷 2005年）によって確認したところ、非文字資料研究センター「国策紙芝居」コレクションに入っているもの（「海國の民」）であった。その他、同記念館に紙芝居が所蔵されているかどうかは不明である。

【注】

- *1 韓国建国大学の權希珠（권희주）さんによる神奈川大学での報告「韓国における紙芝居研究」（2017年1月21日）および建国大学アジアコンテンツ研究所国際学術大会「植民地朝鮮・台湾 風景と記憶」における新垣夢乃報告「植民地台湾の紙芝居—その活動の記憶と記録」（2017年3月25日、ソウル）。
- *2 それはやがて「占領地」というまた独特の範疇を立てることが要請されるということであり、「満洲国」や中国大陸占領地、東南アジアにおける紙芝居活動という論点に広がっていくだろう。
- *3 主として谷暎子前掲書をもとに作成。またA「北海道教育紙芝居研究会発会式」『北海教育評論』162、1940年5月、北海道教育紙芝居研究会「北海道と教育紙芝居 北海道教育紙芝居研究会結成の趣旨・組織など」『同』、土橋明次「北海道教育紙芝居研究会の活動」『同』165、1940年9月、森善次「紙芝居研究会の結成」『同』172、1941年4月、西岡信愛「北海道教育紙芝居教会結成について」『教育紙芝居』第3巻7号、1940年7月、などの雑誌記事による。
- *4 戦時農業共同労働については拙稿『「銃後」の民衆経験：地域における翼賛運動』岩波書店 2016年で詳しく取り上げたがアジア太平洋戦争期および沖繩における実際については不十分であった。

【付記】

本稿脱稿後、谷暎子「紙芝居『勝利の蔭』と北海道の戦時紙芝居活動」『ヘカッチ』12、2017年5月に接した。北海道における戦時紙芝居研究の一つの到達点としてぜひ御参照いただきたい。

周知のように沖繩の地域史は各地域で「新聞記事集成」編が刊行されていて、沖繩における自治体史・地域